様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６１７００５

研究課題名（和文）近代日本における言語様式の重層性と文化的越境の研究

研究課題名（英文）Study about muilti-layeredness of mode of language and cultural border-crossing

研究代表者
イ　ヨンスク（LEE, Yeounsuk）

一橋大学・大学院言語社会研究科・教授

研究者番号：００２３２１０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　この研究では、近代日本において「越境」――国境をこえて「内」から「外」に向かう動き――がもっていた意味、具体的には、明治以降の知識人による海外体験の意味を考察する。その際に重要なのは、事実としての体験と表現としての言語様式のレベルを区別することである。体験はきわめて多様な要素から成っているが、それが一定の言語様式のもとで表現されることによって、意識的・無意識的に言語的な加工がほどこされ、それが固定されると、海外体験を解釈する一定の文化的フィルターとなった。たとえば、紀行文などのジャンルの作品においては、海外生活という異質な経験を紹介することが、ナショナルな感情を吐露する回路となった。

研究成果の概要（英文）：In this study I explore the cultural meanings of border-crossing, which involves moving from inside to outside across the border; that is, foreign experiences by intellectuals in the Meiji period and thereafter. In dealing with this problem, it is important to distinguish a dimension of fact and a dimension of expression. Experience consists of a variety of elements, but when it is expressed in linguistic forms, it is often tailored and arbitrarily constructed, whether consciously or unconsciously. But once expressed in particular discourse, it is frozen as a form of cultural filter through which the original experience is understood and interpreted. For example, it happens that the description of unfamiliar life in foreign countries becomes the channel of exposing the nationalistic sentiments.

研究分野：文化研究

キーワード：文化的越境　言語様式　異文化接触　他者理解

１．研究開始当初の背景

本研究を開始する以前、研究代表者は、近代日本における言語ナショナリズム、言語政策と植民地主義、文化的共同体主義についての研究を進めてきた。巨視的に言えば、近代日本における国民国家をめぐるイデオロギーとディスコースを批判的見地から分析することが主な仕事であった。しかし、研究を進めるにつれて、こうした研究の限界が感じられてきた。ひとつには、近代日本の思想のナショナリズム的傾向を指摘するだけであれば、どの対象をとりあげても、最終的には同じ結論に行きついてしまうことがある。これこそいわゆる「国民国家批判」の議論が共通にもつ弱点である。もうひとつは、ナショナリズムをイデオロギーや思想のレベルだけで捉えることから来る限界である。言説体系やイデオロギーというものは、その内部の矛盾をおおいかくし、自らの起源を隠蔽するものなので、ナショナリズムのイデオロギーをその内部から検討しているかぎり、最終的にはトートロジー（同語反復）に陥ってしまう。

ところが、生きた具体的な文化実践は、一義的なイデオロギーや思想に還元できるものではない。むしろ、そうした外在的な枠組みからはみ出す性格をもつ。近代日本の思想やイデオロギーに同質化、単一化に向かう傾向が強かったのは確かである。しかし、現実の文化実践をよく見てみると、混質性や動態性に向かう方向を秘めていることがわかる。そうした現象に注目することで、近代日本の言語文化を多元的・複眼的にとらえようとすることが、研究開始当初に抱いていた問題意識である。

２．研究の目的

Ａ・ゲルナーをはじめとするナショナリズム論に従えば、ナショナリズムは政治的境界と文化的境界を一致させるために、ネーションを均質化するはずである。ところが、近代日本においては、相互に異質な言語様式が堆積し、それぞれが異なる経験、知識、社会的地位を媒介していた。それは社会空間そのものが分節化されていたことを意味する。この事態は近代日本のナショナリズムの強力さと矛盾しないのだろうか。それとも、日本におけるナショナリズムの独自の展開を表すものなのだろうか。言語様式の多層性は、近代日本のナショナリズムにどのような陰影をあたえたのだろうか。こうした問題に取り組むのが、本研究の目指す第一の目的である。

第二の目的は、文化の動態性に関するものである。具体的には、上に述べた言語様式の縦の多層性が、「内／外」という横の広がりと関係したとき、どのような文化の動態性を生みだしたかという問題である。これを本研究では「文化的越境」の概念によって把握する。そのために、一方では日本／日本語から外部の世界に出た知識人、他方では植民地から日本語の世界に到来した知識人のあり方をとりあげ、その歴史的意味を考察する。たとえば、日本の内から外に向かう運動として、海外の体験がどのような言語様式で表現されたかを考察する。ここでは外国に滞在した作家や知識人の経験だけでなく、海外移民についての言説も検討対象になる。

３．研究の方法

文化研究が概括的な議論に陥らないためには、一定の参照枠組を設定して、一貫した視点と方法を付与する必要がある。そこで本研究では、「言語様式」という概念を試みに設定することにする。

現実の多様な文化実践は、思想やイデオロギーに還元できない複雑さをもつ。この研究においては、「言語様式」という概念を媒介にして、近代日本における文化の重層性と動態性を明らかにすることを目的とする。ここで言語様式とは、思想や表現の内容と相関性をもち、社会的に構成された言語表現の枠組みとしてとらえる。

個々の言語様式は、文体や語彙など言語の形式的な要素によって特徴づけられるものではない。むしろ、異なる言語様式を経由することによって、社会のなかでの経験のあり方、知識の獲得や分配、文化的権威の価値付け、言語主体の位置決定と所属などに、どのような違いが現われるかを問題にする。つまり、言語様式とは、個人の言語的知識と社会的制度ないし文化の「界＝場」（ブルデュー）を媒介するものである。

４．研究成果

本研究における成果は、近代日本の知識人における海外体験の意味を考察しただけでなく、その体験を読者に伝える際の言語様式の特異性にまで分析を及ぼしたことである。その典型的な例として、思想家河上肇による紀行文『祖国を顧みて』（1915）を取り上げる。その紀行文における河上のナショナリズムは、通常理解されている批判的知識人としての河上の姿を大きく裏切るものである。しかし、だからこそ、その著作における河上の言語表現には、近代日本の知識人の矛盾が典型的に体現されていると見ることができる。以下にその詳細を述べる。

(1) 旅行記というジャンル――読者共同体との関係からみて

旅行記の作者は、多くの場合、わたしたちとおなじ共同体に住んでいる。その作者が、共同体のわたしたちの代わりとなって、他のひとたちが行けない国に行って、そこの事物や出来事を報告してくれる。いわば、旅行記とは、共同体のわたしたちの代理体験なのである。そして、代理体験で満足しないひとは、自分もその体験をしようと思って、旅行記が書かれた国を訪れる。そこで体験したことは、

どんなに初めてのものであっても、前に旅行記で読んだことのある内容の追体験、二次的体験になってしまう。こうして、旅行記に書かれた体験は、交換可能の情報となって、読者のあいだを流通する。

旅行記の作者がわたしたちと同じ共同体に属しているという事実は、作者が文章のなかで表明する意見や価値判断が、かなりの部分でわたしたちと共有可能であることを示している。なにを良いと感じ、なにを悪いと感じるか、なにを美しいと感じ、なにを醜いと感じるかは、作者と読者のあいだに暗黙の前提となって共有されている。そして、旅行記の作者は旅に出かけても、またおなじところに戻ってくる。出かけたときの作者と帰ってきたときの作者との違いこそ、旅行記の性質を決めるひとつのポイントになる。「異質なもの」と出会って作者が変容する度合いが強ければ強いほど、その旅が作者にあたえたインパクトは大きなものとなり、共同体の既成の物語のなかに回収することが難しくなる。もちろん、ここでいう「作者」とは、旅行記のなかで言語化された作者――多くの場合は「わたし」という一人称――であり、生の人間としての作者ではない。

こうした視点から、近代日本の旅行記を見てみると、どんなに強烈な外国体験にさらされても、最終的には作者のアイデンティティが同一のまま維持される場合が多いように思われる。それは、作者と読者がひとしく属する共同体の枠組みの強さを意味する。

(2) 河上肇の西欧体験

多くの左翼知識人が「転向」して体制支持の立場に回ったなかで、河上肇は一貫して批判的な態度を貫きつづけたし、けっして権力に屈しなかった。その意味で、河上は近代日本では稀に見るほど思想と信条の一貫性を保ちつづけた知識人であった。河上のマルクス主義理解に多くの問題点があることが指摘されながら、それでも多くのひとが河上への敬愛の念をもちつづけているのは、河上のこの思想的一貫性のためである。

このような知識人の書いた旅行記であるなら、さぞかし日本に対する批判的な視線が宿っているものと想像するだろう。しかし事実はその逆である。数ある旅行記のなかで、河上の『祖国を顧みて』ほど、「祖国」日本に対する愛国主義的感情が満ちあふれている本は少ない。いったいなぜそのようなことになるのだろうか。

『祖国を顧みて』にまとめられた文章のほとんどは、『大阪朝日新聞』に掲載されたものである。本全体は四部に分かれている。それぞれのセクションは新聞に掲載された順番ではなく、内容によってまとめられている。第一部「西洋と日本」では、日本と対比して観察した西洋文明の特質が論じられる。第二部「日本民族の血と手」では、日本と日本人に特有の文化的・社会的・人種的特質が論じられる。第三部「戦塵余録」では、河上がヨーロッパ滞在中に勃発した第一次世界大戦に直面したベルリンとロンドンの様子が生き生きと描写される。最後の「漫遊雑記」では、河上が実際に体験したヨーロッパの都市でのさまざまな風俗が描写される。このなかで河上が最も力を込めて書いたのが、「西洋と日本」「日本民族の血と手」であり、そこで展開された西洋と日本の比較文明論こそ、この本の主題をなすものであった。

河上によれば、西洋はあらゆるものをその構成要素である最小単位にまで分解する傾向がある。西洋の視点からは、それぞれが等しい部分が組み合わさって、全体が形づくられる。これを河上は「西洋の分析主義」と呼んだ。それに対して、日本文化はものごとを部分に分解せず、全体をひとまとまりのものとして把握する傾向にある。河上によれば、西洋の個人主義と世界主義、日本の家族主義、国家主義の違いは、こうした文化的特質の違いに根差しているのである。

河上はこの対照をあらゆるところに見つける。建物の建て方、食器の種類や並べ方、食事のしかた、衣服の着方、舞踏、音楽、文字、文章、庭の作り方、結婚のあり方、家族関係、社会組織などである。さらには、西洋の鍵つきのドアと日本の紙張りの障子の対比、西洋と日本での釣銭の足し方の違い等々にまで、河上の筆は及ぶ。いまであれば、通俗的な比較文化論に使えそうなテーマにあふれており、事実、その後の文化論に引き継がれた話題も多い。

たとえば、河上は食器について次のように述べる。

> 西洋の食皿はどれもこれも皆同形同大のものである。すべての煉化石が同じきように、すべての食皿が同じい。スープを盛るとかいうような特別の必要なき限りは、すべての食器を同じ単位のものに還元しようと努めた跡が著しい。然るに日本式ではそれと反対に、飯を盛る食器、汁を盛る食器、刺身を盛る食器、酢の物を盛る食器、香の物を盛る食器、その他すべての食器を成るべく形を異にし大きさを異にしようと努める。（河上 2002:17-18）

つまり、日本式の食器は「個々別々に単独の存在を為すべきものではなくて、すべてが膳の上に互いに頼って一の統一体を成す」のであり、「それが実に日本の家族主義と同じ精神のもの」を表わしている。それに対して、西洋の食器は「一個の食皿がそれ自身で単独に存在すべきもの」であり、「西洋の個人主義と同じ性質のもの」であるとされる。
ここで述べられる西洋の個人主義と日本の家族主義という対比は、河上がもっとも重要とみなす違いのひとつである。西洋の社会組織の単位は個人であり、社会関係は個人がと

りかわす契約からなる。西洋では、夫と妻のあいだの関係でさえも売買や貸借の関係と同じ性質のものである。ところが、日本の社会組織の単位は家族である。日本の社会関係は「赤と青と相接しているのではなくて、必ずその中間に紫があり、赤は何時とはなしに紫となり、紫は何時とはなしに青となる」ように、個人と個人、家族と他人の間の境界をぼかす部分がある。「日本国家なるものはかくの如くして成立し、かくの如くして成育したる世界独特の国家」なのであり、「日本の社会組織には実に言うべからざる面白味があって、西洋の社会の如く煉化石を積んだるが如き機会的の臭が全くない」（河上 2002:34）という。たしかに河上は、こうした特徴をもつ日本社会の欠点も指摘しているが、叙述の調子からみて、河上が日本社会の固有性を積極的に評価しているのは疑えない。

こうした議論の根底を支えるには、河上の次のような信念である。つまり、日本文明――河上は「日本文化」といわず「日本文明」という用語を使う――は西洋文明に対して劣っているのではない。ただその出発点と方向が違うだけなのである。したがって、盲目的に西洋文明を崇拝し、日本文明を軽蔑するのは誤っている。たしかに、科学文明、物質文明の分野では、西洋は進んでおり、それを積極的に取り入れなければならないが、「これと同時に、吾々は驚くべき発達を遂げたる日本式の文明を有っていることを忘れてはならぬ。この日本式文明は西洋式文明の輸入を急ぐがために、決して粗末に打ち壊すべきものではない」(河上 2002:54) と河上はいう。

河上はこのような西洋と日本の対比を、ヨーロッパ滞在の経験のなかから練り上げていったわけではない。河上が日本を発ったのは 1913 年 10 月、12 月にフランスのマルセイユに到着、しばらくベルギーに滞在した後、2 月にパリを訪れ、4 月にはベルリンに向かっている。そして河上は、1913 年 4 月には旅行記の最初の部分を書いている。これほど短期間の間に、上で見たような議論を組み立てられたのは、河上がヨーロッパに行く前から西洋と日本を比較するための枠組みを準備していたからである。たしかにヨーロッパ滞在は議論に使う材料を豊富にしただろうが、極端にいえば、河上の比較文化論は、西洋に行かなくても書けるような性質のものだった。「西洋」と「日本」のステレオタイプ化が目立つのは、河上の議論がアプリオリな前提の外に出ようとしないからである。

(3) 人種主義理論とナショナリズム

これまで見てきただけでは、河上は行き過ぎた欧化主義に警鐘を鳴らした文化的ナショナリストとしか見えないかもしれない。しかし河上の議論はもっと先を行く。第二部「日本民族の血と手」で河上は、西洋と比較した日本人と日本文化の特徴をつぎつぎと抜き出し、その優秀性を主張していく。そして驚くべきことに、その議論の支えとして河上が使うのは、チェンバレンに代表される国家有機体説と人種主義理論なのである。

ヒューストン・ステュアート・チェンバレン（Houston Stewart Chamberlain、1855－1927）は、イギリス生まれの評論家であるが、ワーグナーに心酔していた彼はワーグナーの娘婿となり、後にドイツに帰化した。1899 年に著わした『19 世紀の基礎(Die Grundlagen des neunzehnten Jahrhunderts)』は、汎ゲルマン主義と反ユダヤ主義的人種理論を唱えた本であり、後のナチズムに大きな影響をあたえた。河上は『祖国を顧みて』のなかで、このチェンバレンの著書の内容を紹介しており、その内容をこうまとめている。現在のヨーロッパ文明はチュートン人が作ったものである。チュートン人は世界を征服する使命を担う人種である。ある人種に他の人種の血が混じると、その人種の力は弱くなる。チュートン人の優秀性はその血がひたすら純粋に保たれているところにある。河上はチェンバレンの主張をこうまとめた後、次のようにいう。

> 今これを私の立場から見ると、折角彼がチュートン人のために気焔を吐く積りで拵えた千頁に余るこの著書は、あたかも日本人のためにその自信とその自覚を喚起する積りで書いてくれたものなるかに感ぜらるるのである。(河上 2002:80)

河上によれば、はるか遠い過去には日本列島に多数の人種が集まり「血液の大混合」が起こったでけれども、「日本国家」が組織されてからは、「かつて一度も異国人の侵入または征服を受けたることなく、爾来実に二千余年の久しきに亘り、永く血液の純潔を維持して今日に到った」のである。そして河上は次のようにいう。

> 種々なる血液が絶えず流れ込んでいる所には決して感情及び思想の国民的統一を見ることは出来ぬ。吾々が今日、日本人独特の鞏固なる国民性と国家とを有ち得るに至ったのは、全く吾々の祖先が久しくその血液の純潔を維持し来ったためである。〔中略〕されば日本人位優等人種成立の条件を完全に具備した者は、東洋は勿論全世界に於てその例を見ぬのである。髪の色、眼の色、皮膚の色に於ては、吾々は新附の朝鮮人に酷似している。また隣国の中国人とも大差はない、しかしながら過去二千年の歴史に於て彼我の間には雲泥の差異がある。(河上 2002:81-82)

もちろん、生物学的な社会進化論や人種主義は、明治以降、天皇制イデオロギーを支える柱として日本の思想風土に根づいた面が

あるので、このような主張はけっして河上独自のものではない。この旅行記は河上のヨーロッパ滞在中に書かれ、すぐに日本に原稿が送られて新聞に掲載され、多くの読者に読まれたことを思い出すべきである。このような主張は、河上が独自の見解を提出したというよりは、作者河上と読者のあいだで成立した「常識」を強化するような働きをしたにちがいない。しかしそうはいっても、これほどあからさまな人種理論によって日本人の優秀性を唱えた人物が、日本のマルクス主義者のうちでもっとも頑固に信念を貫き通した人物であることは、やはり驚くべきである。

(4) 河上肇における国家主義と日本主義

経済思想史家の内田義彦氏は、マルクス主義に移行する以前の河上肇の経済思想には、たがいに矛盾する二つの側面があると述べている。ひとつは、ぜいたくを悪とみなし、倹約と節制によって社会改良を成し遂げようとする、きわめて儒教的な考え方である。この考え方にしたがえば、社会の根幹を支えるのは農業であり、商業活動の肥大化が社会道徳の悪化をもたらすものとみなされる。しかし、河上には別の側面があった。それは、社会の分業を社会進化の必然的なプロセスとみなし、生産と分配の合理化の必要性を説く見方である。内田氏によれば、これはアダム・スミス的なブルジョワ合理主義の考え方に近いという。前者は反近代的な考えであり、後者は近代的な考えである。河上はこの二つの考え方の矛盾に取り組みながら、それを乗り越えるために、しだいにマルクス主義に近づいていった。この思想のダイナミズムこそが河上のマルクス主義理解を独特なものにしたと同時に、河上の思想に内在的な「強さ」をあたえた。（内田 1992）

実はナショナリズムについても同じような見方が成り立ちうる。河上はヨーロッパに行く前の 1911 年に「日本独特の国家主義」という論説を書いている。この論説は、1910 年におこった大逆事件への反応として書かれた。大逆事件とは、天皇暗殺の嫌疑をかけられた幸徳秋水をはじめとする多くの社会主義者たちが検挙された事件であり、翌年には 36 名に対して死刑が執行された。この事件は権力側のフレームアップであることが明らかになっている。

河上はこの事件を通じて日本国家の暴力性を痛感したにちがいない。論説「日本独特の国家主義」には、この国家主義と思想的に対決しようとする河上の姿がある。その冒頭では、日露戦争以降、「西洋文明輸入の反動時代」に入ったことが書かれる。その特徴のひとつとして、日本文化の優秀性を賞賛する復古的傾向が台頭し、学者のなかでも「日本民族性の研究」が盛んになった。海外から帰国したひとの話を聞いても、西洋崇拝を唱えるひとは稀になり、「多くは彼の短を挙げて我の長を示す急なるかの観あり」という。河上はこうした風潮をみて、「思想上の今の時代は最も大切なると同時に最も危険なる時代」であるという。数年後に河上自身が旅行記を書くに至ったとき、河上はこの一節を思い浮かべなかっただろうか。

この論説でも河上は、西洋と日本の文明論的比較をおこなっており、西洋の個人主義と日本の国家主義、西洋の分業主義と日本の合力主義が対比される。そして、日本においては、西洋のような人格概念や政治体制は成立しえない。なぜなら、これらは個人の自立価値を最上位に置くのに対して、日本では個人の価値は国家にどれだけ貢献するかで計られる。だから日本にあるのは「人格」ではなく「国格」であり、日本国は「君主国」ではなく「国主国」であるという。そして河上はこう述べる。

> 日本人の眼中脳中心中最も高貴なるものは国家を措いて他あらず。〔中略〕彼らにとりて最上最高最大の権威を有する者は国家にして、国家以上に権威を有する者あるべしとは彼らの決して想像しあたわざる所なり。故に学者は真理を国家に犠牲し、僧侶はその信仰を国家に犠牲す。これ即ち日本に大思想家出でず大宗教家出でざる所以なりといえども、しかも日本人は国家の存立と相容れざるが如き思想宗教を味わうの要求を有せざるが故に、彼らはかかる大思想家大宗教家の出でざることを悲しまず、あるいはむしろ悦びつつありというを得べし。（河上 1987:40）

ここでの河上の議論について内田義彦氏はこう述べている。河上は西洋の個人主義に対する日本の国家主義を措定して考察し、その結論は読者にゆだねている。しかし「日本独特の国家信仰は、それが相対化され研究の対象となることそれ自体によってすでに信仰たるを失う」。国家信仰が日本人一般に受け入れられ、簡単には科学的探求の対象とはならないものであったとしても、「すでにそれは河上自身の信仰ではなくなっている」と（内田 1992:304）。

しかしそれでは、「日本独特の国家主義」に対する信仰を捨てたはずの河上が、数年後の『祖国を顧みる』では、なぜあのように強烈なナショナリズムの論調に染まったのだろうか。たしかに河上は、第一次世界大戦が勃発したときのベルリン市民の興奮をみて、「すべて狂喜の様である。私はかつて見た事もない」と書き記した。そして、すべてに統制が貫かれている集団主義のドイツよりも、個人の「自由」を尊ぶイギリスの方が好きだとも書いている。その河上がなぜナショナリズムへの免疫をもてなかったのだろうか。

ひとつには、日本の歴史的・文明的位置に河上が自覚的だったからである。たしかに、日本の国家主義には多くの欠点がある。しか

しそれは日本人が引き受けざるを得ない規定性であって、単純に西洋思想を導入するだけでは問題は解決しない。西洋の個人主義を性急に導入するのではなく、従来の国家主義をできるかぎりよい方向に向かわせることこそ、唯一とるべき方策なのであると考えたのではないだろうか。

河上は海外で日本製品を見たときに感じた感覚、それは明治時代には西洋に圧倒されてきた日本がしだいに世界に拡大してきたのを見たときの感覚である。それは民族をひとつの生命体とみて、その成長を喜ぶ気持ちである。そしてその感覚が、現在の世界は人種競争の場であるという認識と結びついたとき、将来のマルクス主義者には似つかわしくない人種主義理論を採用させるに至ったのではなかろうか。その面からみても、河上肇は近代日本における思想の矛盾を一身に背負った存在であるといえる。

参考文献

河上肇（2002）『祖国を顧みて』（1915 年刊行）岩波文庫。
河上肇（1987）『河上肇評論集』杉原四朗編、岩波文庫。
内田義彦（1992）『作品としての社会科学』岩波書店、同時代ライブラリー。
ゲイル・L・バーンスタイン（1991）『河上肇―日本的マルクス主義者の肖像』清水靖久・千本秀樹・桂川光正訳、ミネルヴァ書房。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　３　件）

① Lee, Yeounsuk. Homogenization or Hierarchization?: A Problem of Written Language in the Public Sphere of Modern Japan, Arokay, J., Gvozdanovic, J., Miyajima, D.(eds.), *Divided Languages?--- Diglossia, Translation and the Rise of Modernity in Japan, China and the Slavic World* (図書所収論文), Springer, 2014. pp.141-158.査読有。

② イ・ヨンスク「日本語教育が『外国人対策』の枠組みを脱するために――外国人が能動的に生きるための日本語教育」、庵功雄、イ・ヨンスク、森篤嗣（編）『「やさしい日本語」は何を目指すか―多文化共生社会を実現するために』（図書所収論文）、ココ出版、2013 年。259-278 頁、査読有。

③ イ・ヨンスク「言語政策の観点から見た言文一致」延世大学近代韓国学研究所編『韓日近代語文学研究の争点』（図書所収論文）、ソミョン出版、2013 年、259-278 頁、査読有。（韓国語）

〔学会発表〕（計　10　件）

① Lee, Yeounsuk, Tsuda Umeko and Inoue Sadayakko: Pioneer Female Migrants of Japan to the West and an Alien Culture, AAS-IN-ASIA Conference: Asia in Motion: Heritage and Transformation, July 17, 2014, Singapore National University. (Singapore)

② イ・ヨンスク「「やさしい日本語」は橋渡し言語になりうるか」、公開シンポジウム「「やさしい日本語」研究の現状とその展開」、2014 年 5 月 24 日、一橋大学。（東京都、国立市）

③ イ・ヨンスク「教室は社会的真空空間か？」、名古屋 YWCA 日本語教育セミナー30 周年記念フォーラム、2014 年 3 月 8 日、名古屋 YWCA。（愛知県、名古屋市）

④ イ・ヨンスク「女性の表現者とモダニズム」、UBC Seminar: The Cultural Location of Women in Korea and Japan 1600-1945, August 14, 2013, University of British Columbia. (Vancouver, Canada)

⑤ Lee, Yeounsuk, The Multi-layered Experiences of Border-Crossing in Modern Japan, 8th International Convention of Aisa Scholars (ICAS), June 25, 2013. (Macao, China)

⑥ イ・ヨンスク「「帝国」を記述する言語、「帝国」を支える言語」、プサン大学人文学研究所（招待講演）、2012 年 12 月 6 日、プサン大学（韓国、プサン市）。

⑦ イ・ヨンスク「ネーションをめぐる社会的境界線、マイノリティ、情動性」、日本英文学会第 84 回全国大会、2012 年 5 月 26 日、専修大学生田キャンパス（神奈川県、川崎市）。

⑧ イ・ヨンスク「日本社会での多言語共生の可能性を考える」、名古屋 YWCA 日本語教育セミナー（招待講演）、2012 年 4 月 13 日、名古屋 YWCA（愛知県、名古屋市）。

６．研究組織

(1)研究代表者

イ　ヨンスク（LEE, Yeounsuk）
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：００２３２１０８